

PWE (Paddy and Water Environment) 現状と展望  
Present situation and perspective of PWE (Paddy and Water Environment)

凌 祥之, 溝口 勝

Yoshiyuki SHINOGI, and Masaru MIZOGUCHI

### 1. はじめに

PWE(Paddy and Water Environment)は2003年1月刊行以来10年以上が経過した。4年前に念願のIF (Impact Factor) を取得し, 2年前にはその値が1.2を得たものの, 昨年は値が1.1と低下し, 懸念が走った。IFの推移は重要な要素である。

ここでは, 例年のようにPWEの現状を総括して紹介し, 現時点の問題点を踏まえ, 今後を展望してみたい。

### 2. PWEの現状

PWEはこれまで発刊以来2015年まで, 13巻, 50冊を発刊し, 511編の論文を掲載し, 公開している。IFについては毎年7月頃に公表され, PWEは初年度(2012年)0.986の値を取り, 以降1.247, 1.151と比較的高い値を獲得しているが, 昨年から低下している。しかし, テキストの引用回数は順調に増加しており, 2015年度は33,500回の引用を超えた。IFの数値では農業工学系でも農学系では概ね中間位の位置にいる。当該誌が水田を主対象としており, アジアが投稿者や閲覧者(ダウンロードで言えば64%がアジア太平洋地域)の中心という状況を考慮すれば, 大健闘と言えるのではないだろうか。

2014年のPWEへの総投稿数は180件であり, 2015年は173件と幾分低下基調であるが, 150を超える投稿数は維持している。2015年では, 査読に回した論文数が159編, その中で, Acceptが44編(28%)でRejectが115編(72%)と厳しい数字を維持している。初回投稿から平均で308日でAccept判定がでており, Rejectの判定は初回投稿から平均で116日でなされている。

**Table 1 PWE への投稿状況**

Submissions	2011	2012	2013	2014	2015
<b>Total Submitted</b>	<b>114</b>	<b>88</b>	<b>196</b>	<b>180</b>	<b>173</b>
<b>Total Decisions</b>	<b>90</b>	<b>72</b>	<b>198</b>	<b>148</b>	<b>159</b>
Accept	59	44	62	58	44
Reject	31	28	136	90	115
Acceptance Rate	66%	61%	31%	39%	28%
Rejection Rate	34%	39%	69%	61%	72%
Average Days to Final Disposition Accept	166	192	289	203	308
Average Days to Final Disposition Reject	88	154	59	84	116

いわゆるSTAP細胞事件以来, 各出版物に対しても著者の研究者倫理責任を厳密に明確化する必要が顕在化し, PWEでも投稿者の研究者倫理に関して, 投稿時のInstruction for Authorsに道義的責任の確認事項を追記した。但し, 論文の内容の詳細にまで精査, 確認をするのは容易ではない。

\*九州大学大学院, \*\*東京大学大学院, Kyushu University, Tokyo University, キーワード; PWE, 雑誌, 編集

PWE 編集部では、2014 年からチーフマネージングエディター（CME）を韓国の Jing Yong Choi 氏が勤め、2015 年 3 月から台湾の Yu-Pin Lin 氏が参加し、2016 年 4 月現在は溝口勝 Editor-in-Chief の下、2 名の CME 体制で編集作業を行っている。

現在オンライン化を目指した議論を進め始めているところである。

### 3. PWE の問題点

これまでの問題は、PWE の投稿資格や財政基盤の問題である。これまで様々な議論がなされてきたが、今後はオンライン化を目指した議論が始められる。財政基盤の安定化は必要であるが、より多くの良い投稿を確保するということを両立させるために更なる議論が必要である。

ここ数年 PWE への投稿数が増加し、査読件数が増え、査読体制が疲弊気味である。これまで Editor の専門領域に関するデータベースの再構築と確認を行うなど、適正な Editor に編集や査読が行くような改善を行ってきた。しかし、一部の Editor や査読者に多大な負担を頂くケースも増えている。特に近年は査読者の確保に悩まされている。著者推薦の査読者にも容易に断られ、途方に暮れるエディターが後を絶たない。査読者の拡大により、不徳の査読者も増え、著者との問題を起こす事例も増えている。

PWE の編集作業を行う Managing Editor や Editor も固定化や高齢化が進み、疲弊気味と見受けられる。台湾では若年化に成功しているが、日本やそれ以外の関係国でも若手層の参画や登用がさらに必要になり、支持基盤の拡大と活性化が望まれる。

また、なかなか各国のマネージングエディターとの交流が進まず、編集や査読体制の確立や更新・改善ができていない。

近年は印刷品質や査読期間の延長に関する苦情が増えている。特に査読体制の強化が必要と思われる。

### 4. PWE の展望

現在、編集体制の若年化と拡大を目指して、溝口 Editor-in-Chief を中心に新たなエディターや編集ボードの更新と拡大を行っている。合わせて編集ボードの専門性を確認できるデータベースの更新を行い、編集作業が効率的に行える組織体制作りのための改善を行っている。また、査読者を比較的容易に探せる手順などの知見も蓄えているところである。

IF の向上対策については、現実的な方策として、高品位な論文はできる範囲で早期に掲載したり、自己引用を増やしていくなどの地道な対策しか効率的な方法は見当たらない。地道な広報と投稿者への協力依頼が必要になってくる。

一方、PWE の経営戦略としては何らかの形で購読者やサポートする国を増やしたり、責任著者に少額でも投稿料を頂戴して、持続的な経営改善を図る技術的、組織的な対応が必要であるように思う。当然質が高い論文の確保も必要であり、積極的な広報と勧誘は常に必要である。このためには編集部として何を行わなければならないか、編集部内の意見調整と企画立案などのアクションが必要である。

### 5. おわりに

学術誌が多数存在する現在、PWE も常に淘汰の危機を抱えている。経営体制が盤石な学会などは容易にオンライン化に進め、原則無料で投稿と閲覧ができるが、PWE の現状は楽観的ではない。重なる研究分野の他誌とは、ある意味で競争をしなければならない。投稿も掲載も全く無料（一部）でどこまでできるか。これまで PWE を創立当初から支えて頂いた方々への謝意を忘れないで、PWE がさらに発展していくために編集部として何をしなければならないか、常に自問と対策の確立と行動が必要である。